

## 【特定健康診査の検査項目】

	検査項目	検査の目的	備考
	腹囲	体の脂肪には、皮下脂肪と内臓脂肪があります。内臓脂肪が過剰にたまった状態（内臓脂肪型肥満）になると、糖尿病や心筋梗塞、脳卒中などを引き起こしやすくなります。	全員に実施する検査です
の肥指満標度	BMI	肥満、やせではないかを調べる検査です。腹囲が基準値内でもBMIが25以上であれば、内臓脂肪型肥満のおそれがあります。 BMI=体重(kg)÷身長(m)÷身長(m)	
の高検血査庄	血圧	収縮期（最大）血圧は心臓から血液が送り出されるときにの圧力で、拡張期（最小）血圧が心臓に戻ったときの圧力です。血圧が高い状態が続くと、血管が傷つき、動脈硬化を起こしやすくなり、脳卒中や心筋梗塞を引き起こす原因になります。	
血中脂質の検査	総コレステロール	血液脂肪のひとつで、動脈硬化の目安になります。	
	中性脂肪	食べすぎや飲みすぎ、肥満によって数値が高くなります。中性脂肪が多くなると、動脈硬化が進みやすくなります。	
	HDLコレステロール	善玉コレステロールとも呼ばれます。血管の内側に付着した悪玉コレステロールをはがして肝臓へ運び、動脈硬化を防ぐ働きがあります。	
	LDLコレステロール	悪玉コレステロールとも呼ばれます。血中の量が多くなると血管内壁にたまり、動脈硬化を進行させます。	
肝機能の検査	GOT (AST)	肝臓や心臓の筋肉、骨格筋に多く分布している酵素です。肝臓に異常があると上昇します。	
	GPT (ALT)	ほとんどは肝細胞に含まれ、この数値が高いとウィルス性肝炎、アルコール性肝炎、脂肪肝などの肝障害が疑われます。特に内臓脂肪型肥満の人は、脂肪肝には要注意です。	
	γ-GT (γ-GTP)	肝臓や胆道に障害があると数値が高くなります。アルコール常飲者では数値が高くなることから、アルコール性肝炎発見の指標ともなります。	
血糖の検査	空腹時血糖	血液中のブドウ糖を血糖といいます。血糖値があがると、すい臓からインスリンというホルモンが分泌され、血糖値を下げようとします。インスリンが不足したり作用が足りないと、血糖値は高いままになり、糖尿病と診断されます。	
	HbA1c (NGSP値)	過去1～2ヶ月間の平均的な血糖の状態を調べることで判断できます。 ※平成25年4月より、HbA1c (NGSP値)が健診判定値となります。	
	HbA1c (JDS値)		
	尿糖	尿中に糖が出ているか調べます。血糖値が高くなりすぎると、尿にも糖がもれ出てくるようになるため、糖尿病の進行具合を判断することが出来ます。	
腎機能の検査	尿たんぱく	尿にたんぱくが出ているかどうか調べます。たんぱくは通常は尿に現れるものではありませんが、腎臓に異常がある場合に尿にもれ出てくる可能性があります。	
	尿潜血	尿中に血液があるかどうか調べます。腎臓、尿管、膀胱、尿道などの異常を発見する手がかりになります。	
	クレアチニン	老廃物の一種で、腎臓の機能が低下すると、排泄できなくなり、血液中に増加します。	
	eGFR	老廃物を尿へ排泄する力の推算値です。この値が低いほど腎臓の働きが悪いとされ、慢性腎臓病(CKD)の重症度分類の指標となります。	
	尿酸	腎臓が正常に働かないと上昇し、尿酸が多すぎる状態を高尿酸血症といい、痛風の原因となります。	
	アルブミン	低栄養発見の手がかりになります。	
貧血の検査	白血球	体内に炎症などがあると、高くなります。	医師の判断により実施する検査です
	赤血球	血液中の赤血球数を調べ、貧血等の疑いを調べます。	
	ヘモグロビン	赤血球中の酸素を運ぶたんぱく質のことです。減少すると、貧血が疑われます。	
	ハマトクリット	血液に含まれる血球の割合を調べ、貧血かどうか調べます。	
	血小板	出血傾向の目安になります。	
心臓の検査	心電図検査	心臓病の判断の目安になります。	
眼底の検査	眼底検査	脳動脈の硬化や高血圧・糖尿病性病変の程度の判定が出来ます。	